各地で医療新施設

工場跡地などに民間活力を導入

川崎駅西口の大宮町地区に、救急救命機能を有する医療機関と都市型住宅が一体となった複合施設が誕生する。川崎市住宅供給公社と医療法人財団石心会（同市幸区）の共同事業で、六月から都市計画手続きに入る。計画では住宅棟は二〇一一年一月、病院棟は同年十二月の完成予定。

（三木　崇）

川崎駅西口・大宮町地区

都市型住宅と一体

川崎駅西口に誕生する複合施設のイメージ

老朽化した市営住宅や旧公団住宅、東芝の工場跡地など、用途が混在していた大宮町地区約八・二㌶のうち、同公社が東芝から取得したF街区約五千四百平方㍍を民間活力を導入して再開発する。

住宅棟と病院棟を一体的に開発し、総床面積は約二万六千八百平方㍍。住宅棟は地上二十三階、地下一階建て。分譲マンション百九戸に保育施設を併設する。

石心会は主に県内で医療機関を運営しており、市内の医療施設の一部を統廃合する。病院棟は地上十一階、地下一階建て。入院床二百六十五床に加え人工透析用六十五床、救急救命室（ER）十五床を設ける。循環器や脳血管、消化器などの専門医療を充実する方針で、石心会は「立地が恵まれていることから救急医療センターの機能を強化させたい」としている。

大宮町地区には音楽ホールと商業の複合施設「ミューザ川崎」などが建設され、商業・業務機能と住宅が一体となったまちづくりが進んでいる。